

---

# 運命と花言葉

きんう

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

運命と花言葉

### 【Zコード】

Z2665C

### 【作者名】

きんづ

### 【あらすじ】

小さい時に分かれた二人が会う。一人の印は一輪の花  
・  
・  
・  
少し切なくする予定です。

## 人物紹介（前書き）

初めて書いた小説です、広い心で見守つてやって下さい。  
題名とズレルかもしれませんがよろしくお願ひします。

## 人物紹介

### 人物紹介

時村 祐一  
ときむら ゆういち

緑応学園に通う17歳で、この話しの主人公的な存在  
面倒見はよいが、協調性は皆無  
花を育てるのが好き。

過去に子寺院に入っていた、その後今の親に引き取られる。  
成績は普通

篠本 一斗  
しのもといっと

この話しの二人目の主人公的な存在  
明るい性格で、とても正義感が強い。  
しかし冗談や、悪戯が大好き。

一と同じ緑応学園に通う17歳

成績は優秀

藤堂 遥  
とうじょう ゆきはるか

この物語の多分ヒロインで、感情変化が激しい17歳  
只今、染井総合病院に入院中で、一つ下の妹がいる。

成績は・・・お世辞にもいいとは言えない

藤堂 静香  
とうじょう じょうか

遙の妹。

第二ヒロイン、姉とは正反対の性格??

と言ひか、いつも眠そう。

只今16歳

成績は優秀

藤岡 聰美

ふじおか さとみ

緑心学園の教師で祐一や、一斗の担任。

通称フジさん

容姿淡麗だが . . . とても気性が荒い . . .  
嫌な事があると、いつも生徒を連れてカラオケ。  
年は本人いわく永遠の20歳 . . . らしい

## 人物紹介（後書き）

お見苦しい点等ありましたらご指摘をお願いします。

## 序章（前書き）

プロローグ的な感じです。（^ - ^）。

桜が散り、木は緑の葉っぱを付けている

しかし、蝉の声はもう聞こえない、季節はもつすぐ秋になる。

そんな、風が心地よく吹く、小さな公園で一人の少年と一人の少女がベンチに腰かけている

もつ口が傾きオレンジ色の光が辺りを包んでいる

「なくなよ」

「だつてえ・・・ひつく・・・う・・・う・・・」

「もあ、泣き虫だなあ遙は」

「な、ひつく・・・泣き虫じやな・・・ひつく・・・ひつく・・・  
ないもん」

「もあ・・・本当に、仕方ないじゃないか父さんの仕事の都合な  
んだから。

だからもう泣くなつて」

しかし、少女は以前と少し泣きやめたりはしない。・・・

「もう、しょうがないなあ。

ちょっと待つてろよ

少年はそう言つて公園の近くの家に向かつて走つて行つた

「あ、待つて」

少女が慌てて停めたが、すぐ帰つてくるからと言つて少年は家に入つて行つた

少しして少年がまた公園に姿を現した

「恐いが、これやめかう、やつ泣きやめよ」

男の子の手には一輪の花が握られている。

「これはな、ふりむらつて言う花だ」

「歎息の歌」

「うん、  
ふりむら

「あ、ありがとうございます」

女の子は花をもらつて満足げに微笑んだ。

「じやあ俺行くな

「う、うさ

言葉ではなく、うと黙つて居るが女の子はまた泣きやつくなっている。

「だ、か、ら、も、う、泣、く、な、つ、て。

あ、そうだ。い、事、教、え、て、や、る、よ

女の子は今にも泣きそうになつながらも、じりじりと、ウルンだ田で  
みていく。

そして、今にも泣えそうな声で小声へ歸ついた。

「い、事、?」

「うさ、花にはね花言葉があるんだよ

「はな」と、?

「うさ、花言葉。

でね、ふつむりの花言葉は・・・・・・・・

がばつ・・・

「また、あの夢 . . . . .」

一人の少女がベットから起き上がり、周りを見渡し、時計に目を向ける

時刻は8：00

「静香はもう居ないのね」

私は最近よくあの夢を見る . . . .

とても懐かしい記憶

夢の先を思い出すとどうしても思い出せない . . . .

昔、好きなだつた人との記憶 . . . .

ま、いつか思い出せるよね。

少女は少し納得したような表情で再びベットに潜りこみとした時

ピ～ポ～ピ～ポ～

外から救急車の音がケタタマシク響いて来る。

「こんな朝から事故?」

少女はベットから起き上がり、カーテンを開けて備え付けの冷蔵庫からペットボトルのお茶を取り出し、飲みながら部屋から救急車を見下ろす。

救急車からは一人の少年と少女がタンカで病院へ運び込まれている。

そして、それを見ている少女の顔も青ざめていく。

「ブ~~~~。

し、静香あーー?」

なんで、どうして? ?」

見事にお茶が霧状になり中に消える

少女はかなりテンパリながらも、とりあえずナースコールを押す。

1分後、慌てて勢い良く看護婦が部屋に飛込んで来る。

「大丈夫ですかー? 水無月さん。

あ、あーーー」

慌てた看護婦はドアの段差につまづき、勢い良くヘッドスライディングをする。

それはもう見事な程に。

「あいた、た、た、」

「茜さん、大丈夫ですか～」

「な、なんとかね」

茜さんと呼ばれた看護婦は腰を擦りながらゆっくり立ち上がった。

「もう、ホントに毎回、毎回よく飽きませんね」

少女は少し大きめのため息をついた。

「わ、私が悪いんじゃないんだからね。  
この段差が・・・」

「ハイハイ、段差がね。

それ、もう一〇回以上聞きましたよ」

「え、そうだつたかしらー？」

ハ、ハ、ハ、まあ気にしない、気にしない」

茜は笑つて誤魔化した。

「ホントこもる」

「「」みんなさーい・・・」

所で何でナースホールを？

見たところ変わった様子は無いみたいだけど……………？」

そこで、少女はまた顔が青ざめしてきた……。

「遙ちゃん…………」

「は、は……」

「せっしきの救急車で……。」

「ああ、静香ちゃんの事？

心配無いわよ、どにこも怪我して無いわ。  
今は氣絶してるけどね」

茜は落ち着いた口調で少し笑いながら、話した。

「や、そつなんですか。  
よかつた……。」

少女はホッと胸を撫で下ろした。

でも、そこで少女にひとつ目の疑問が浮かび上がった。

何で静香が救急車に?????

しかも、何で氣絶?????

「あの茜さん . . . 」「.

少女は顔を上げて茜の方を向く。

「ん、ふああに?..」

茜は何故か煎餅を食べている

「あ~それ私の煎餅~。

せっかく後で食べようとしたのに . . . 「.

少女は少し目がウルンでいる。

茜はそれを見て . . .

もつ半分も無いのを差し出して

「食べげる?..」

「もういいです . . . グスン」

少女は今にも泣き出しそうな顔だ . . .

「ホント～」「めんなさい。  
許して下せ～」

茜は、ふかぶかとお辞儀をした

しかし、少女は此方を向い「はしない・・・

「ホント～」「めんなさい、同じもの買つて来てあげるから。  
許して、ね、ね？」

「本当～？」

少女は少しウル田で此方に向き直つた。

「ホントにホント」

何故片言？

まあ、そんか事はないといつて

「わ～い、じゃあ、影屋の大福も付けてね」

「え～看護婦の給料も少ないんだぞ～」

「食べた茜さんが悪い。それと、勝手に患者さんの物食べない方がいいよ」

「は～い、以後気を付けま～す」

「うん、よろしい、な～んてね。」

アハハ

少女と茜はお互いを見て笑いあつた。

茜は少しどジだが、いつも患者田縁で物を見るのでとても人気ものだ。

だから、常に彼女の周りには笑いが絶えない。

「でさ、 茜さん」

「なあ～にい？」

「何で静香は救急車で運ばれて來たの？」

「ああ、 それはね ． ． ．

この病院から僕達の物語は始まつた。

いや、もつと昔から始まつっていたのかも知れない

ちょっと切ないストーリー

今朝の眞実？？（前書き）

第一話です m (— —) m  
おかしな所もあるとは思いますがよろしくお願ひします m (— —)  
m

## 今朝の眞実??

「」は染井総合病院  
僕、時村祐一は親友の篠本一斗のお見舞いに訪れていた。

307号室。ネームプレート『篠本一斗』

「」だな

僕は少し咳ばらいをして扉をノックした。

「どうだ~」

僕は中からの声を確認してから勢いよくドアを開けた。

「失礼しま~す」

「祐じやないか、よく來たな」

ベッドの上で本を読んでいた一斗は本を閉じて此方を向き笑った。

僕は元気そうな一斗を確認してホッと胸をなでおろした。

「よ、入院した割には元気そうだな。あ、これ見舞い品」

僕はそう言って来る途中に買つた一斗大好物のドーナツを渡す。一斗はとても嬉しそうな顔をした。

僕はなにげなく一斗の部屋を見回した。

一斗の部屋は白を基調とした普通の一人部屋で風通りがいい、心地よい部屋だった。

「お、サンキュー」

斗は僕が渡した箱の中からチョコが付いたやつを頬張りながら席を一つ出してくれた。

僕は一斗が出してくれたイスに腰を下ろした。

そして、朝の事を話し始める。

「でもあせつたぜ。朝来ないからフケたのかなって思つてたら、フジさんが来て「篠本は朝、事故にあつて入院しました」だからな。眞めっぢや心配してたぜ。てか何で事故つたんだ?」

僕が聞いた時一斗は少し悩むような顔をしながら答えた。

「ん~それがさあ、今日さ、早く目が覚めていつもより早く家を出たんだよ。そしたらさあ、目の前を歩いてる女の子が突然車道側に倒れて、危ないと思つて助けに飛込んで気がついたらベットで寝てたつて感じかな」

そう言って一斗は笑いながら新しいドーナツを頬張った。

僕も自分用に買つたドーナツを頬張りながら相づちをうつ。

「でも、お前スゲエよな。よく助けに飛込めるよ、俺だつたら多分見てる事しか出来ないよ。」

「そんなことねえつて、俺だつて足ガクガクだつたんだぜ?」

でもな、何か助けなきやつて思つて、気がついたら体が勝手に動いてたんだ～。

やつぱ本能つてやつ～？」

「へえ～本能ねえ。

でもやつぱり、本能でも助けに飛込めるだけ凄こと思つよ。やつぱ一斗つて昔から正義感だけは強いからな、スゲエよ

「だけつてのは余計だよ。

でも、俺は正義感は強くねえよ。

だつて俺は当たり前の事をしただけなんだからよ」

いや、それを当たり前と言つお前はやつぱりスゲエよ。

その当たり前の事を出来るやつは少ないと思つし、普通は出来ないと思つから……

「こや、やつぱりお前はスゲエよ

「凄くなんかねえよ」

一斗は少し照れながら笑つた。

でも、なぜか一斗は事故の事を話す時に顔が少し曇つた……

那些細な一斗の変化に気がついたなら僕はこの後、後悔しなかつただりつ……

僕たちはそれから今日学校であった事等を話しあつた。

いろいろ話している内に時計はすでに六時を指している。  
窓からはオレンジ色の光が差し込み少し眩しかった。

もうやるやう帰らうかと思つて立ち上がりうとした時に僕は一斗に少し気になつた事を聞いた。

「あ、そうだ。なあ、一斗」

「ん、どした?」

一斗は不思議そうな顔をして此方を向いた

「いや、大した事じやないんだけど、その助けた女の子はどうなつたんだ?」

それを聞いた瞬間一斗の顔が曇る . . .

その時僕の頭に最悪の状況がよぎつた

まさかな . . .

そして、一斗は下を向いてひつひつむいてしまつ . . .

僕はそれ以上聞くことも出来ず、僕も黙りこんでしまつ . . .

. . .

どのくらい時間がたつただろうか . . .

既に日は落ちかけていて、オレンジ色の光は一層強く差し込むできていた。

僕はそのままじゅうじゅうなこので、意を決して口を開いた。

「なあ . . . 」

「祐、頼みがあるんだ . . . 」

僕が喋るとほぼ同時に一斗が口を開き、僕の言葉を遮った . . .

「なんだ？」

「向こうに向いてくれないか . . . 」

僕は口も言わず向こうを向く . . .

でも見てしまつた、一斗の頬を流れる一筋の涙を . . .

それから一斗が静かに語りだした . . .

「俺さ、気がついたらベットの上だつたって言つただろ？」

僕はあえて返事も相づちも打たなかつた、いや、打てなかつたのかもしれない . . .  
だから何も言わず、静かに一斗の話に耳を傾けた . . .

「俺が気がついた時にお袋が隣にいてさ、始めは泣いてたんだけど、何とかなだめて女の子の事聞いたんだ . . .」

一斗は声が少し震えていて . . .

僕はどうする事も出来なくて . . . ただ下をうつむく事しか出来なくて . . .

とうとう僕の目にも涙が溢れてきた . . .

でも、僕が泣くわけにもいかなくて . . .

僕が泣いたら一斗の頑張りが無駄になるから . . .

「でもさ、お袋も詳しくは知らないくて病院の人にはこうと呼ぼうとした時に、知らない女人が入つて来て、突然俺にお礼を言つたんだ . . .」「ありがとう」

つて、始めは何の事だろうと思つたんだけど途中で気が付いたんだ . . . 女の子の母親なんだって。

でさ、その人は案の定女の子の母親で、その人の話によると . . . 女の子は出血多量で俺が起きる数時間前になくなつたんだって . . .

俺さ、それ聞いた時不思議と平氣だつたんだ。でも、一人になつて時にさ . . . 多分自分が情けなかつたんだと思つ、突然涙が止まんなくてさ . . . 全然知らない子なのに

なんで、助けられなかつたんだろう . . .

なんで、俺が生き残つたんだろう . . .

そんな事ばかり考えてさ、不安に押し潰されそうで . . .

「ゆうう.」

気がついたら僕は一斗を抱きしめていた。

「もひいいよ . . .

「祐 . . .」

「一斗がもう苦しむ必要はないんだ」

「ありがとう . . .

全部が終わつた時、時刻は既に八時前で . . .

「じゃあ、俺やうやう帰るわ」

「え～もひ帰るのかよ～もひかよ～と西野さん～」

「無理だよ、俺明日も学校あるし……」

「ちえ、わかつたよ」

「一斗は渋々と解した。」

「また明日来てやるからよ」

「じゃあ明日もアーナシで」

「考えとくよ。じゃあな」

「ね～、また明日～」

「僕は一斗の病室を後にした。」

病室を出て自転車置き場の辺りである事を思出した

あ、そ～だ～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

今から戻るのはめんどこな～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

う～～～～～

まあ、届けてやるか

僕は早足で一路一斗の部屋へと向かつた。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2665c/>

---

運命と花言葉

2011年1月16日02時55分発行